「海揚がりの肥前陶磁」展

著者	野上 建紀
雑誌名	金大考古 = The Archaeological Journal of Kanazawa University
巻	68
ページ	17-21
発行年	2010-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2297/25639

「海揚がりの肥前陶磁」展

野上 建紀

江戸時代から明治前期にかけて、肥前陶磁は海路によって運ばれた。陶磁器のように重くてかさばるものを遠くへ大量に運ぶためには、その運搬手段として船が選ばれたのである。

しかし、伊万里などの港から肥前陶磁を積み出した船は必ずしも目的の港に到達しなかった。不幸にも波間に消えた船もあったし、時化の中、積荷を投げ捨てた船もあった。あるいは港に辿り着いたとしても運搬中に積荷が壊れてしまうこともあり、港の海底に捨てられることもあったのである。

2010 年 10 月から 11 月にかけて、有田町歴史民俗資料館において開催した企画展「海揚がりの肥前陶磁」は、そうした海路によって運ばれた肥前陶磁の流通の痕跡を紹介し、その海路の復元を試みたものである。

1　船で運ばれた肥前陶磁

まず肥前陶磁の流通の歴史を少し振り返ってみよう。肥前陶磁の生産の歴史は、16 世紀末に始まる。大陸からの技術導入によりまず施釉陶器の生産が始まった。すなわち、唐津焼の誕生である。そして、豊臣秀吉の文禄・慶長の役によって、多くの朝鮮人陶工が連れ帰られ、さらに肥前の窯業は発展した。やがて磁器原料が発見され、有田を中心とした地域で磁器の生産が開始された。17 世紀初めのことである。以後、近世を通して、有田は磁器生産の中心であり続けた。

唐津焼が早い段階から海路によって遠隔地に運ばれていることは、消費地におけるその出土状況により明らかである。特に瀬戸内海と日本海側では早くから多くの唐津焼が運ばれていた。瀬戸・美濃の商圏と棲み分けていたと考えられる。そして、有田焼など肥前磁器もその唐津焼の流通ルートにのる形で運ばれていった。

やがて 17 世紀中頃には国内の磁器市場を独占することになる。当時の磁器輸出大国であった中国が王朝交替に伴う混乱により磁器輸出を激減させたためであった。さらに17世紀後半には中国が海禁政策を行ったことにより、肥前陶磁は海外市場に出回らなくなった中国磁器に代わって東南アジアをはじめ、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカへと運ばれていった。肥前陶磁を積んだ船は世界を回ることになった。

17 世紀末に中国が海禁を解いた後は、国内市場の比重が大きくなるが、海外輸出によって拡大した生産能力は、日本国内の新たな購買層を開拓していくことになる。そして、発達した国内海運によって、それは支えられ、全国津々浦々に運ばれた。

藩による専売制が敷かれた時期もあったが、肥前陶磁の流通には伊万里商人をはじめとした多くの商人が介在していた。特に江戸中期以降は、多くの旅商人が活躍した。全国の市場を相手にした筑前商人、江戸通いを行った紀州商人、彼らは伊万里に来航しては、陶磁器を買い積み、全国へと売りさばいていった。

そして、明治時代を迎えても船による輸送は続いていた。海路による輸送の転機が訪れるのは、鉄道が敷設されたことによる。生産地の有田から直接、消費地に運ぶことが可能になり、伊万里港も積出し港としての役割を終えることとなった。その結果、海路による肥前陶磁の流通もまた終焉を迎えることとなったのである。

2　海揚がりの肥前陶磁

海揚がりの肥前陶磁の性格は一様ではない。商品として船に積み込まれて沈んだものもあれば、船上で使用するために持ち込まれて沈んだものもある。また、陸側から海に廃棄されたものもある。

そして、それらが発見される状況も一様ではない。海底で発見されるものもあれば、海岸に打ち上げられたものもある。同じ海底であっても陸地から遠く離れた外海の海底もあれば、港の海底に沈んだものもある。同じく海岸に打ち上げられたものであっても、海底にあったものが打ち上げられたものもあれば、陸上から海へ流出したものが流れ着くものもある。このように海から揚がった陶磁器の性格や状況はさまざまである。

（1）陶磁器の性格による分類

まず陶磁器の性格について整理しておく。海に沈んだ陶磁器は、①商品、②容器（商品の一部）、③船上の使用品、④陸上の使用品に分けられる。

①商品は積荷として船に積み込まれたものである。一般に同一種類のものが複数見られる場合が多い。沈

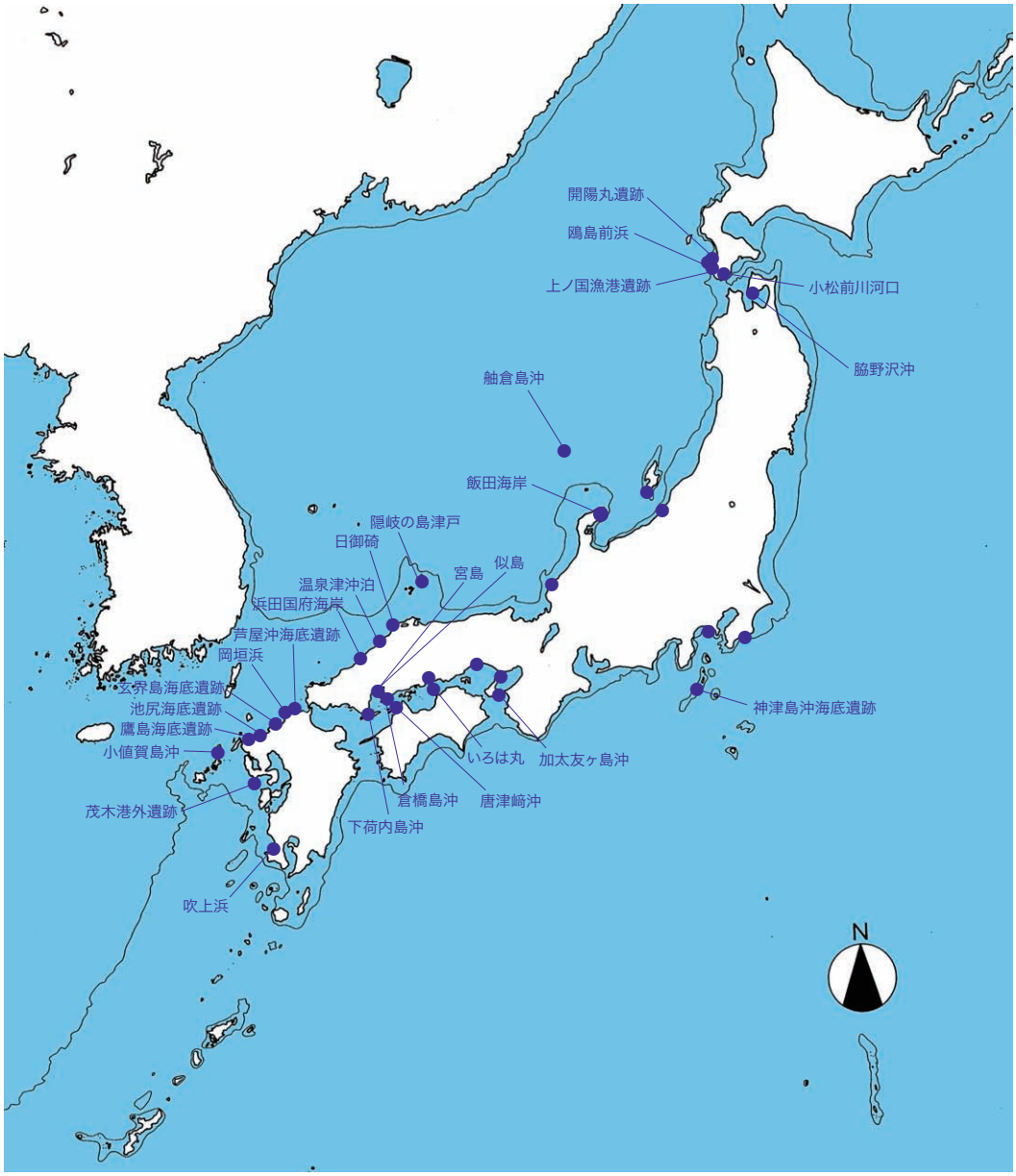

図１　「海揚がりの肥前陶磁」分布図

んだ船が１艘である場合はもちろん複数の船であっても一度に遭難したものであれば陶磁器の年代幅も限られる場合が多い。すなわち、商品の場合、使用期間を考慮しなくてよいため、沈没年代に近い生産年代をもつ陶磁器となる。一方、荷揚げした陶磁器が港で破損して、その場で廃棄されることもあろう。継続的に廃棄が行われれば年代幅も広いものとなる。

②容器も商品の一部ではあるが、陶磁器そのものが商品というよりは、むしろ内容物が商品である。再利用が可能であるため、陶磁器そのものが商品であるものよりは使用期間を考慮する必要が出てくる。生産地に近い最初の積出し港から直接運ばれているものなどは、あまり使用期間を考慮する必要はないかもしれないが、中継港などに一度荷揚げされたものなどは再利用されて積み出されることも理論上ありえる。

③船上の使用品は、船上の乗組員などが使用するために船に持ち込んだものである。船は小さいながらも乗組員にとっては生活空間であり、生活用品として船に持ち込まれた。船の乗組員の人数に見合う程度の量であることが一般的である。それは陶磁器の種類によっても異なる。例えば碗などは乗組員の人数分が船に持ち込まれることはあるであろうが、仏飯器、香炉や擂鉢などについては人数分の数量が必要な理由を考えにくい。また、明確な使用痕跡があれば判断しやす

い。擂鉢などは摺目が摩滅しているかどうかで、商品か使用品か判断することも可能であろう。

④陸上の使用品は、港など陸上で使用された陶磁器が海に廃棄されたり、陸上の遺跡の陶磁器が海に流出したものなどである。ただし、前述のとおり、港で廃棄される陶磁器は、港で破損した商品が廃棄される可能性もあるので、明確な区別はつきにくい。

（２）沈没状況と陶磁器の性格

海底で発見される陶磁器と海岸に打ち上げられる陶磁器に分けて、沈没状況と陶磁器の性格の関係をみてみる。

①海底発見の陶磁器

海底で発見される陶磁器は、運搬途上に沈んだものと、港で廃棄されたものがある。

１）運搬途上に沈んだもの。

陸地から離れた海域で沈んだものの多くは、沈没船あるいは沈没積荷に伴うものである。北海道開陽丸遺跡、青森県脇野沢沖、石川県舳倉島沖、広島県いろは丸遺跡、和歌山県加太友ヶ島沖海底遺跡、山口県下荷内島沖、唐津崎沖、広島県倉橋島沖、東京都神津島沖海底遺跡、福岡県芦屋沖海底遺跡、福岡県玄界島海底遺跡、佐賀県池尻海底遺跡、長崎県鷹島海底遺跡、長崎県小値賀島沖､長崎県茂木港外遺跡などが該当する。

船体が確認されている開陽丸やいろは丸の陶磁器を除けば、沈没船そのものなのか、それとも遭難に際して積荷のみが海中投棄されたものか、区別することは難しい。沈んだ遺物の量から判断すれば下荷内島沖、神津島沖海底遺跡などは沈没船である可能性が高い。

これらの陶磁器の中で積荷の商品と思われるものは、舳倉島沖、加太友ヶ島沖海底遺跡、下荷内島沖、芦屋沖海底遺跡、玄界島海底遺跡、池尻海底遺跡、長崎県茂木港外遺跡などの資料である。いずれも同種のものが複数個体，発見されている。

容器と見られる陶磁器は、脇野沢沖で引き揚げられている瓶・壺類である。産地は複数あるが、時代はいずれも幕末～明治初期である。

船上の使用品と考えられるのが、開陽丸遺跡、いろは丸遺跡である。開陽丸は戦時の軍艦であり、使用品と考える方が妥当であろう。いろは丸はミニエー銃など商品を運搬していたとされるが、陶磁器については商品というより使用品である可能性が高い。ただし、同一種類のものが複数個体確認されている染付端反碗

写真１　茂木港外遺跡海底写真

写真２　いろは丸出土陶磁器（鞆の浦歴史民俗資料館蔵）

などは商品である可能性を残す。神津島沖海底遺跡で発見されている陶磁器の中で、大量に発見されている堺あるいは明石産の擂鉢は商品と考えてよいが、少量発見されている肥前磁器は使用品か、商品か断定することはできない。染付中皿などは内面にのみ細かい傷が多数ついており、これが使用痕であれば、使用品と考えてよかろう。

鷹島海底遺跡や小値賀島沖の陶磁器は、判断が難しい。おそらく商品と船上の使用品が混在しているのではないかと思われる。

２）港（船着場）で廃棄されたもの

北海道鴎島前浜の海底では、かつて和船の姿を見ることができたとも伝えられ、船そのものが沈んでいる可能性が考えられる。すなわち、港は必ずしも安全な場所ではなく、船が沈むこともあったと言える。しかし、港の海底から発見される陶磁器の多くは陸上から廃棄されたものが多いと思われる。

北海道上ノ国漁港遺跡、島根県温泉津沖泊などで発見される陶磁器は、港で廃棄されたものであろう。陶磁器の年代幅が広く、種類も豊富である。港の生活と

写真３　上ノ国漁港遺跡出土陶磁器（上ノ国町教委蔵）

写真４　温泉津沖泊海底写真（撮影：山本祐司）

写真５　岡垣浜採集陶磁器（添田征止氏蔵）

写真６　岡垣浜採集陶磁器片（添田征止氏寄託）

歴史を物語る資料であるが、個々の陶磁器の正確な性格を知ることは難しい。前述のとおり、船からの荷揚げ時にそのまま廃棄されたものであれば、性格的には商品であり、港で使用された陶磁器が廃棄されたものであれば陸上の使用品である。

②海岸発見の陶磁器

海岸発見の陶磁器は、運搬途上に沈んだものと陸地からの廃棄あるいは流出したものに分けられる。

１）運搬途上に沈んだもの

福岡県岡垣浜、鹿児島県吹上浜などで採集されている陶磁器は、沈没船あるいは沈没積荷の一部と推定される。吹上浜の陶磁器は 1650 ～ 1660 年代頃と陶磁器の年代が限られており、一度の遭難と推定されるが、岡垣浜の場合は陶磁器の年代幅が広く、複数回にわたる遭難によるものと推定される。

いずれも共通するのは、いわゆる「浜崖」が見られることである。また、岡垣浜の陶磁器は無傷の完形品が多数含まれており、表面もローリングによる摩耗が見られないものも多い。吹上浜の陶磁器も同様であり、釉上に描かれた上絵が残るものもある。つまり、沈没してから長期間、海底を移動していたわけではなく、採集年代に近い時期まで埋没していたことを示している。

つまり、遭難した船やその積み荷が流れ着き、それを覆うように砂が堆積していった。砂の堆積と浸食の繰り返しによって、その一部は流出しつつも海岸や海岸近くの海底に埋没した状態にあった。それが近年の海岸の環境の変化により砂浜が浸食されていく過程で、陶磁器が洗い出されたのではないかと推測される。

類似した例はアメリカでも見られる。ノースカロライナ州のカローラ海岸で 17 世紀中頃から後期にかけての船が発見された。2009 年から海岸の浸食が激しくなり、砂浜の砂が流されていたという。その過程で沈没船の一部が洗い出されたのであろう。発見された沈没船の写真を観察すると、船の背後には「浜崖」が見られる。

２）陸地からの廃棄あるいは流出

陸地から海へ直接廃棄されたものや陸地から河川等によって、海まで流され、それらが海岸に打ち上げられたものは、多くは陸上における使用品である。北海道松前町小松前川河口付近の海岸や石川県珠洲市飯田海岸などで採集されている陶磁器などは、そうした理

由による可能性が高い。なお、飯田海岸では陶磁器だけでなく、ビー玉やガラス玉が大量に漂着している。海底や河川を移動した結果、摩滅してしまっているものも少なくない。

一方、海岸に廃棄されたものがあまり移動せずにそのまま残される場合もある。干潟などではローリングによる摩耗もなく、廃棄された時と近い状態のまま発見される。広島県宮島の干潟で発見される陶磁器などはそうした例であろう。

3　おわりに

これまで陸上の生産地や消費地の遺跡で数多くの肥前陶磁が発掘され、研究が進んできたが、肥前陶磁の出土分布範囲は水中にまで広がっている。しかもそれは日本国内にとどまらない。今回の企画展では国内の海域から発見された肥前陶磁を紹介したが、肥前陶磁は船で遠くヨーロッパ、アメリカまで運ばれており、世界の海で肥前陶磁は発見されている。いつかそれらを紹介する機会があればと思う。

（本稿は企画展図録『海揚がりの肥前陶磁』（有田町歴史民俗資料館 2010）に掲載した「海揚がりの肥前陶磁展」を加筆修正したものである。）

参考・引用文献

青森県史編さん考古部会編 2003「49　脇野沢沖海上がり陶磁器」『青森県史資料編考古４　中世・近世』青森県史友の会

荒木伸介・石原渉ほか 1987『上ノ国漁港遺跡−昭和 58・60 年度発掘調査報告書−』上ノ国町教育委員会・函館土木現業所

有光宏之・東中川忠美 1996『池尻海底遺跡』玄海町教育委員会

大橋康二 1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集・陶磁編』平凡社

小川光彦 2010「2009 年度・島根県大田市石見銀山遺跡・温泉津沖泊における潜水調査」『水中考古学研究』第３号

九州・沖縄水中考古学協会・小値賀町教育委員会 2002『山見沖海底遺跡』

小林達雄ほか 1993『神津島村神津島沖海底遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告書第 20 集　東京都教育委員会

酒井中 2010「2009 年度・能登半島海岸踏査」『水中考古学研究』第３号

佐々木達夫ほか 2010「日本海海域における水中文化遺産調査概報−平成 21 年度−」『金沢大学考古学紀要』vol. 31　金沢大学人文学類考古学研究室

塩屋勝利 1988「玄界島の海底陶器」『福岡市歴史資料館研究報告第 12 集』福岡市歴史資料館

高野晋司 1992『鷹島海底遺跡−長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書−』長崎県　鷹島町教育委員会

中田敦之編 2008『松浦市鷹島海底遺跡』松浦市文化財調査報告書第２集　長崎県松浦市教育委員会

野上建紀 1998「海揚がりの肥前陶磁」『NEWSLETTER』第４巻第３号　九州・沖縄水中考古学協会

1999「肥前陶磁の流通形態−海揚がりの資料を中心に−」『貿易陶磁研究』No. 19

2000「茂木港外遺跡確認調査− 1998 年 8 月−」『金沢大学考古学紀要』第 25 号

2005「響灘に沈んだ陶磁器−中近世の沈没船・積荷の存在の可能性について−」『水中考古学研究』創刊号

野上建紀 2010『海揚がりの肥前陶磁』有田町歴史民俗資料館

野上建紀・添田征止 2006「陶磁器漂着のメカニズム−三里松原海岸−」『水中考古学研究』第２号

林田憲三 1995「志賀島・玄界島の海底調査」『志賀島・玄界島−遺跡発掘事前総合調査報告書−』福岡市教育委員会

真鍋篤行 1994「瀬戸内海における沈船遺跡について」『貝塚』48　物質文化研究会

宮武正登 2007「「池尻海底遺跡」潜水目視調査の概要」『水中文化遺産と考古学』アジア水中考古学研究所

和歌山市教育委員会 1997『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』

（有田町歴史民俗資料館　nogami.takenori@gmail.com）